

# しごき

第21号



1998年11月

(財) 日本野鳥の会三重県支部

今、感動こそが

世古口 有司 (伊勢市)

世の中景気が悪いというので、産業界や政界はもちろん、マスコミもそのことで持ちきりである。自然保護の観点から言えば、バブルの時にあったような不要な開発が進まないのはましといえる。しかし、単なる景気の問題だけでなく、世の中の進み方自体に何かしらの閉塞感があって、それを含めて景気が悪いといっているように思われる。そうなると、「まし」などとは言っておれない。事実、自然保護の側にも「進まない」という感じがあるのではないか。

いきなり訳のわからないことを書き始めてしまったが、自分のなかにも身の回りにもこういった閉塞感があって、少し弱っているからなのである。それでいろいろ考えてしまうのである。このような状況になると、人はとかく他人に対して必要以上の、また批判的な関心を向けがちである。ろくなことにはならない。私は同和問題解決のための仕事に携わっているが、人権が尊重される社会にするには、他人へのいらぬ関心より自分を大切にし自己を確立することが必要だなどと人に話している。このことを自分に言い聞かせなくてはならない。

その仕事の関係で、先日、歌手の小椋佳さんの話を聞く機会があった。今の世の中、私たちに大切なことは、「生きていく」ことよりも「生きてある」ことだと言っていた。競争社会に都合のよい目的達成型ではなく、日々の暮らしの中で自己を見つめ、自己実現を図っていくことが大切だということだろう。

話は飛んで、最近見たテレビ番組。クジラの調査や記録をするある研究者が、湾内に迷い込んで魚網に絡んだクジラを発見、図らずもそのクジラを救助するというドキュメンタリーであった。彼は自らが関わった体験にとっても感動したことを率直に語っていた。

今大切なこと、それは日々の暮らしや活動の中で“感動”することではないだろうか。その時、心がフランクになって、それがさらに活動の力になる。もちろん、私にとってその感動は鳥がもたらしてくれる。あしたは久しぶりに外へ出て、タカの渡りに感動することにしよう。



支部は野鳥に対する正しい知識の普及をはかり、野鳥を通して自然と共存する考え方を広めることを目的とする (日本野鳥の会三重県支部 規則 第3条、支部の目的)

目次

今月の表紙絵 エゾフクロウ 小坂 里香

- エッセイ . . . . . 2
- 特集・夏鳥はいま . . . . . 3
- 企画部だより . . . . . 8
- 保護部だより . . . . . 10
- 研究部だより . . . . . 12
- 事務局だより . . . . . 13
- 会員のページ . . . . . 14
- 探鳥会報告 . . . . . 15

今月動物園で  
見たエゾフクロウ  
の絵が  
とても  
好きです  
ぜひ  
絵の中  
に入れて  
ください  
あなただけ  
の絵  
を  
見たい  
です

夏鳥はいま...

オオルリとホトトギス

杉浦 邦彦 (伊勢市)

『4~5年ほど前から、冬鳥も夏鳥も過去に比べると大へん減ってしまった』というのが、野鳥愛好家の話題である。本当に、そうなのだろうか？ 急にその返事が欲しいと言われ、過去の資料を整理してみた。どちらの鳥も、減少したことには間違いはない。

一般に、野鳥の増減について一定の場所で一定の期間、同一方法で調査されたものは意外と少ない。むしろ殆んど、どこへ行っても未調査のところが多い。結論は出しにくいが、簡単にとりまとめたのが図1と図2である。どちらも、神宮々域林とその周辺の山地についてのものである。

この地域の環境は、1958年頃はヒノキ、スギの造林地が約1,000ha、4,500haがアカマツを主体とする二次性天然林の常緑広葉樹林(カシ、シイ、ツバキ等)

帯であったのが、1980年頃にはヒノキ、スギの造林地が約3,000haに増加したのに対して、常緑広葉樹林は2,500haに減少している。一見、緑豊かな半自然林といったところである。

さて、図1はオオルリの生息域を声をたよりに描いたもので、神宮々域林の島路山の約2,000haにおける区域内では1974年5月から7月の間にオオルリの雌雄一対の番を調べると全部で11番(実線)となっていたのが、1998年5月から7月にはわずかに3番(点線)となった。73%も減少してしまったのである。

また、ホトトギスの生息域を、声をたよりに概略描くと図2のようになった。1971年5月から8月の間に神宮々域林とその周辺では約5,700haの中に6箇所確認できたホトトギスの雄の鳴声が1998年5月から7月には朝熊山山頂周辺で1個体の鳴声しか確認できなかった。この事例からみると、神宮々域林において夏鳥は1971年に較べて1998年には明らかに個体数が減少しているといえるのではないだろうか。

おなじ夏鳥でも、ツバメは伊勢市宇治地区では増加している。この地域はおらい町通り、おかげ横丁の江戸時代末期から明治末期にかけた町並みである。その周辺には五十鈴川の河川敷と神宮の森が存在することもあり、「食」と「住」の安定した環境が得られているせいか、徐々に増加の傾向を示している。その反面ハシボソガラスとハシブトガラスがツバメの巣荒らしを学習したこともあってこれからどのように変化していくのか興味をもたれている。

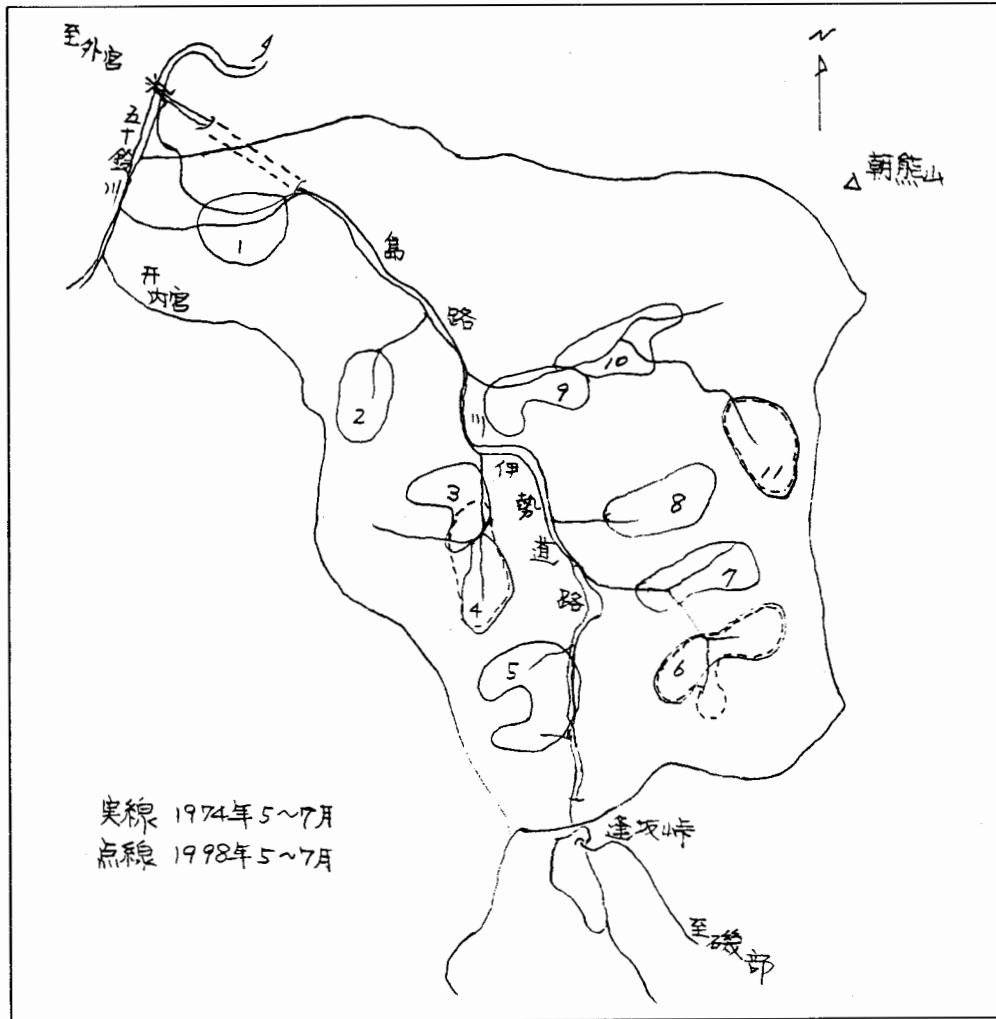


図1 オオルリの生息域

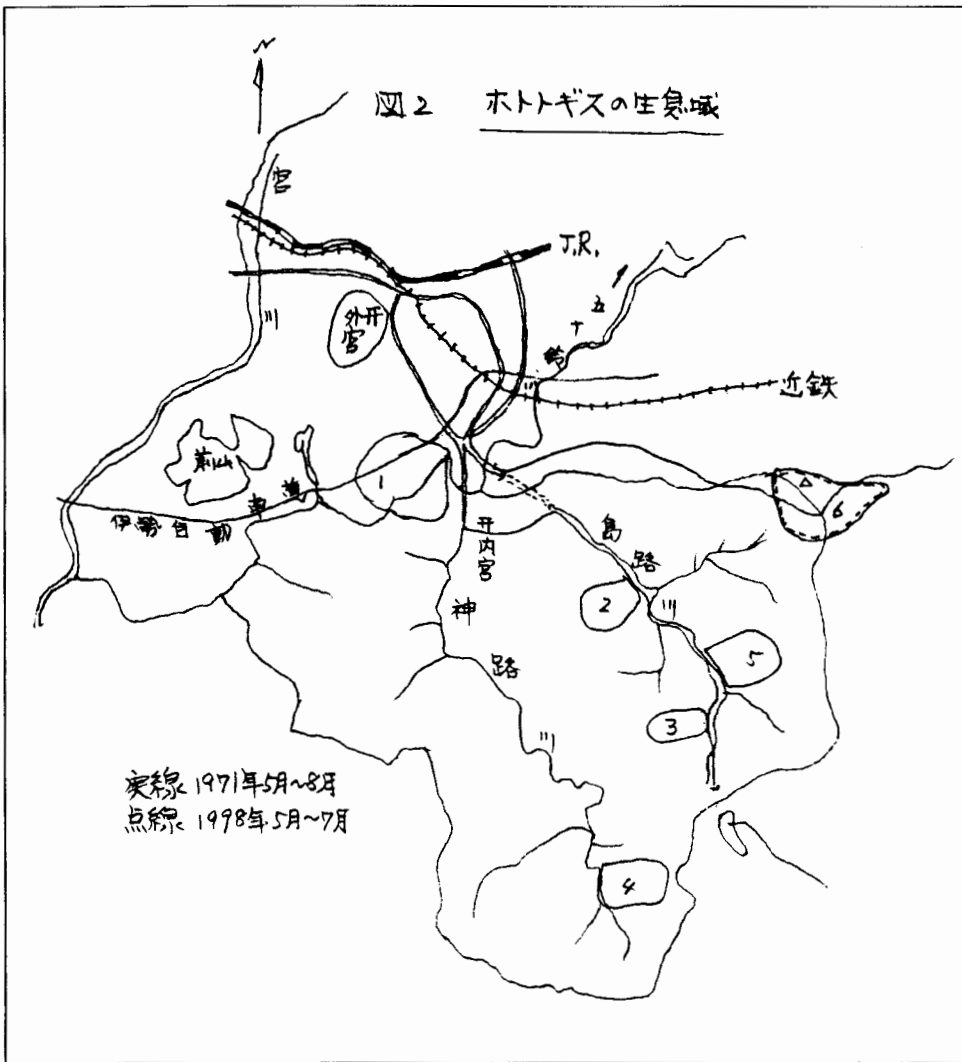


図2 ホトトギスの生息域

最後に、はっきり数量的に表現できる資料が不足している鳥ではアオバズク、サシバ、アカショウビン、ヨタカ、サンコウチョウ、アマサギ、コアジサシなどがある。

いずれにしても、野鳥は移動する範囲が広く、冬鳥も夏鳥と同様に気温の変化が大きく影響を与えるので全国的に同一方法で大規模な分布調査を実施しなければ、冬鳥と夏鳥の増減性については判定しにくいものがある（支部長）。



川原と砂浜の鳥コアジサシ

武田 恵世（上野市）

コアジサシは夏になると川や海でよく見かけるツバメを大きくしたような白いスマートな鳥です。キュルキュルと鋭く鳴きながら、下を見ながら飛び回って、魚を見つけると一直線に飛び込んでとらえます。その動作から鱗刺しの名前が生まれました。実際は鱸やサッパを刺すことが多いようです。

1. 今年絶滅危惧Ⅱ類に指定

一見多そうに見えるコアジサシですが全国的に激減が問題になり、環境庁により今年絶滅危惧Ⅱ類（絶滅の危機が増大している種類）に指定されました。その原因はその繁殖生態にあったのです。

2. 約 500羽以上で営巣しないと繁殖成功率が悪い

コアジサシは川原や砂浜の地表に集団で巣を造り、外敵には激しい攻撃を加えます。その場所が全国的に減っているのです。

日本鳥学会で1992年から「コアジサシは守れるか」をテーマに自由集会を繰り返し、全国の研究者が集まって生態や保護を考えてきました。私も当初から参加しています。その結果次のことがわかって来ました。

- ①成鳥が約 500羽以上集まらないと繁殖成功率が極端に悪い。
- ② 500羽以上集まるのは約 4ha以上の裸地。
- ③ 植被率約30%以下の草の少ない裸地でないと営巣しない。

この条件を満たしうる広い川原や砂浜はもう日本中にほとんどないのです。ある地域で群が 500羽を下回り出すと次の世代が残せず、急速に絶滅に向かう可能性が高いのです。絶滅の数十年前まで黒雲のような群が見られたリョコウバトと似ています。リョコウバトは森林に集団で営巣する種類だったのです。

3. 広い川原や砂浜はなぜ減ったのか？

(1) 川原や砂浜に草がない訳

日本ではいくら草を引いてもまたすぐ生えてきます。川原や砂浜に草が生えないのは、増水や高波で年に何度か洗われ、砂礫が動かされるからです。流れが遠ざかったり、防風林ができたりして砂礫が動かなくなるとすぐに草が生え始めます。川原も砂浜も流れや波で流される量と堆積する量のバランスでそこにあるのです。

(2) ダムは土砂の流下も止める

川では常に水と共に土砂を流しています。増水時にはかなりの量が流れます。それがダムができるとそこで止まってしまいます。そのため日本中で海岸浸蝕が大問題となり、黒部川河口では年間100m以上も海岸が海に消えていっており、一時京都府の天の橋立はやせ細り、北海道の春国袋も野付半島も痩せてきています。天竜川では佐久間ダムに貯まった土砂をベルトコンベアーで海岸に運ぶ計画が具体化しています。

三重県でもこの30年で約20の干潟が海に沈み、砂浜が痩せて来ています。全国的にダムが増えたために広い川原や砂浜が減り、コアジサシもシロチドリもイカルチドリも減って来たのです。

4. どうすれば守れるか

(1) ダムはムダ

アメリカではすでにダムの非効率性と問題点に気づき、新規のダム建設は止め、既設のダムも順次壊しつつあります。もともとダムはその鉄筋コンクリートの寿命が50~60年で、また、土砂が貯まるので有効寿命は約30年とされていました。その間に得られる利益の方が犠牲より大きいので造るものであると土木専門書に明記されています。ところが火力発電の方が効率が良くなり、そうではなくなってしまったのです。最大の問題は寿命が来たダムの処理です。方法は3つ、

- ① すべて壊して土砂も取り除き、一から作り直すこと（これだと建設費の3~10倍費用がかかります）。
- ② 前に大きめのダムを造って、古いダムを埋めしてしまう（黒部第三ダムがそれですが、寿命は前より短くなります）。
- ③ 上流と下流に同規模のダムを造って真ん中のダムの崩壊に備えておく（宇奈月ダムなどがそれですが、新たなダムの寿命が来たときにまた問題になります。砂防ダムは1~2年で埋まるの

で、この発想で一個造ると上下に際限なく作り続けています）。

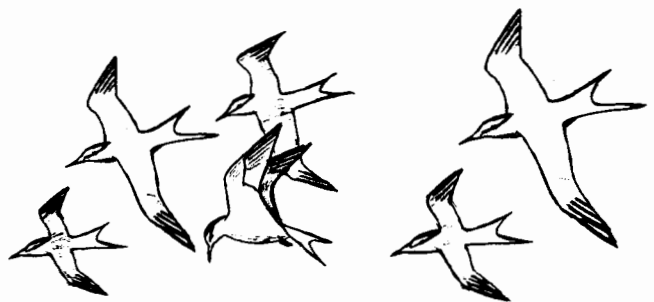
こうした訳で、日本でもまもなく寿命の来たダムの処理に取りかからざるを得なくなります。しかし、それまでコアジサシが残っている保証はありません。

(2) 今コアジサシは駐車場や埋立地で繁殖している

自然の砂浜や川原での営巣は天竜川や酒匂川周辺くらいです。広い砂浜のある九十九里浜や宮崎県の海岸でも少数が営巣するのみで、もっぱら埋め立て地や造成地で営巣しています。千葉県の幕張メッセの駐車場が長いこと日本最大の繁殖地でした。一時長島町の排砂地（浚渫土の仮置き場）が日本最大の繁殖地になり、名古屋港の埋め立て地も大繁殖地になりました。しかし、仮置き場はまもなくなくなり、埋立地も工事が終わると建造物ができるか、できなくても草が生え始めます。だいたい3年で草むらになるので繁殖はできなくなります。

(3) どうやって守るか？

アメリカではスーパーや学校の屋上に砂利を置いて、営巣地になっています。人工営巣地の造成は千葉県、東京都、石川県、小田原市、北九州市福岡市などで行われており、4ヶ所で成功しています。三重県では排砂地の一部を提供することで3年は保護されました。問題はこれからです。



(4) 川や海の浚渫土の有効利用

川は山地の出口で扇状地を造り、平地を蛇行しながら流れてきた土砂をあちこちに堆積させ平地を造り、三角州を造りながら海岸を増やして来たのですが、人間が堤防で固定したので、堤防の中に土砂を堆積させついでには天井川と言って家の天井より高い川になった川も多くあります。滋賀県の草津川は川の下をトンネルで東海道本線と国道1号線が通っています。これほどではありませんが、養老山地の肘江川、三滝川の一部が天井川になっています。ですから川の浚渫は流路を固定し

ている以上、治水上絶対必要になるのです。  
また、海の航路も浚渫が必要です。ですから川や海の浚渫は毎年どこかで必要になります。その土砂をコアジサシの繁殖期間中ならして仮置きして

おくことで、人間の罪滅ぼしをできないものかと考えています。これには国、県、市町村、保護団体の適切な連携が必要です。皆さんのご意見とご協力をお願いします。

サシバ 吉居 瑞穂（伊勢市）

サシバは、里山自然の生態系の頂点にいる生き物の一つです。しかし、繁殖期の4～7月にサシバの姿を見かけることが非常に少なくなりました。サシバの繁殖に適した環境である里山自然が、私たちの住む地域では開発や稲作の休耕などによって大きく変化していますし、サシバのエサであるカエル、ヘビ、トカゲ、大形の昆虫などがどれも減っている感じをもっています。私は最近、これらのことが繁殖期にサシバが少なくなった原因ではないかと考えるようになりました。

そこで、1995年から自宅に近い伊勢の市街地に隣接した鼓ヶ岳の北部山麓地域を中心に、サシバの営巣調査を始めました。調査の実施にあたっては、30年以上タカの営巣を調べておられる川北 俊夫さんの指導を受けることにしました。川北さんは1975年から確認した巣を記録されていて、1982年には我が家の近辺（藤里町）の調査も行われました。それらの記録から巣があった地点を現在の地図上に丸印で描くと図1のようになります。

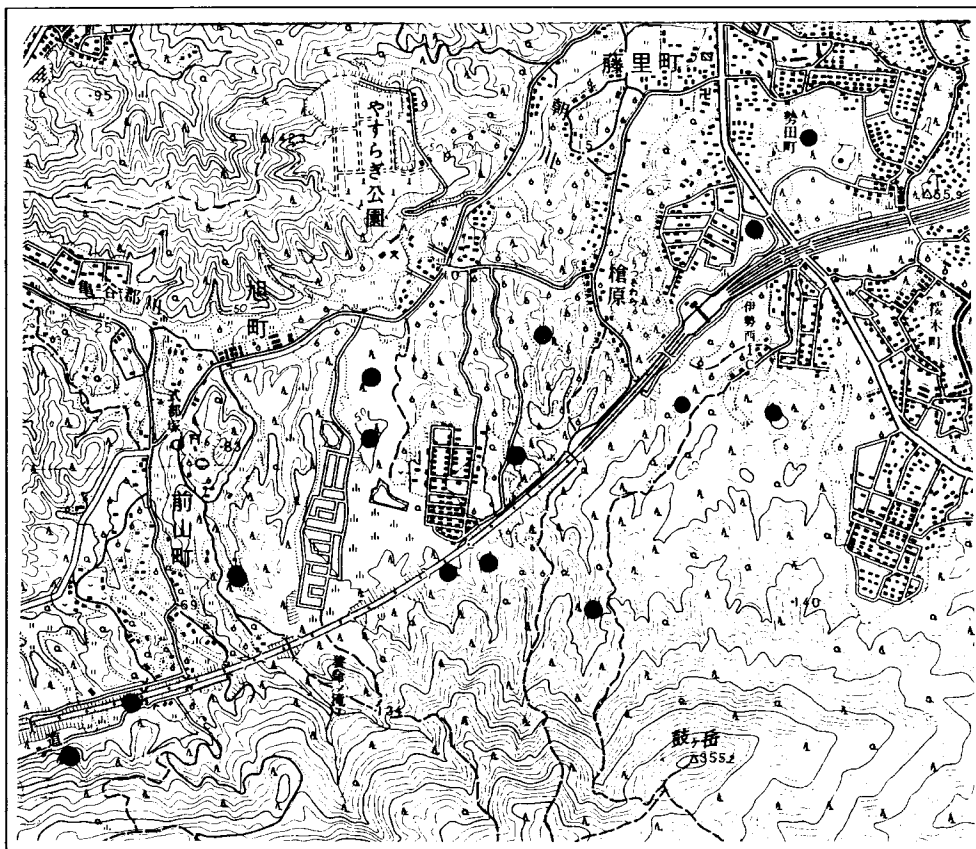


図1 伊勢市の鼓ヶ岳北部山麓で、以前サシバの巣があった場所（●印）

図1を見ると、かつて勢田町から藤里町にかけて多くの巣があったことが分かりますが、今では巣がまったく見られなくなりました。また、川北さんの調査と現状を比べると

- (1) 勢田町船江山では1960年代の初めまでは多くの巣がありました。1960年代中頃から開発が始まり、1975年に巣が確認されて以降、この地域でサシバの繁殖は確認されていません。
- (2) 1982年には藤里町およびその周辺の調査が行われていて、5ヶ所で営巣が確認されました。しかし、1992年に巣が確認されて以降、巣は見つかっていません。

1987年には勢田町のひもろぎの里で私自身がサシバの巣を発見し、翌年まで営巣を確認しました。1995年から1998年にかけての調査では、この地域で番（つがい）が息しているという確認はできませんでした。このように、サシバが営巣できなくなった原因とし

ては、次のような事柄が考えられます。

- ① 1973年頃から鼓ヶ岳北部山麓が住宅団地として次々と開発されたため、営巣に適した場所が減少した。
- ② 山麓の湿田が埋められ、果樹園に変わった。また、残った水田も収穫後、乾田となるように改良された

- ため、サシバのエサであるカエル（特にアカガエル）の産卵できる場所が無くなった。
- ③休耕田が増えて、田んぼが背丈の高い草で覆われたため、サシバが餌を取れなくなった。
  - ④サシバの主な営巣木である松の木が大規模な松枯れで減少したため、営巣できなくなった。
  - ⑤1994年に開催された祝祭博の工事の影響で、カラスの夏ねぐら（2～10月）が朝熊山山麓から鼓ヶ岳の北部山麓に移ってきた。そのため、カラスの滞留数が多くなり、サシバの営巣に大きな影響を与えた。
  - ⑥1994年に開通した伊勢自動車道は、かつてのサシバ

の営巣地と完全に重なっている。自動車道の工事が始まった1991年頃にはすでにサシバの営巣は激減していたと考えられますが、自動車道の工事が鼓ヶ岳北部山麓のサシバの営巣適地に最後のダメージを与えたことは確かである。

以上の結果から、鼓ヶ岳の北部山麓では、サシバがこの20年間で激減したと思われます。

一方、私は自宅周辺でおよそ15年間、秋のタカ渡りを調査して来ましたが、比較的信頼度の高いデータが得られている1987年以降の渡り数の推移をまとめると、図2のグラフのようになります。

1987年と1989年にあった5000羽を越えるような渡りが、最近は見られなくなっています。渡りは気象条件によってルートが変化することや、そのルートでの全数を把握することが非常に難しいこともあって、この数字だけから単純に増減を言うことはできません。しかし、伊良湖岬での大がかりな調査でも減少傾向が伝えられていることなどを考え合わせると、サシバの生息数が全国的に減少しているように感じられます。

サシバは長い間、里山自然の水田とそれを取囲む森林を好んで生きてきましたが、その環境がこの数十年間に大きく変わりました。その環境は中山間地農業によって維持されてきましたが、それが今、続けられない状況になっています。サシバの将来がとても心配です。

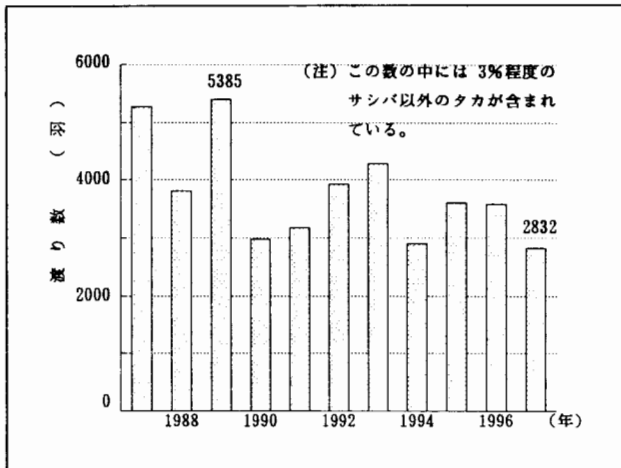
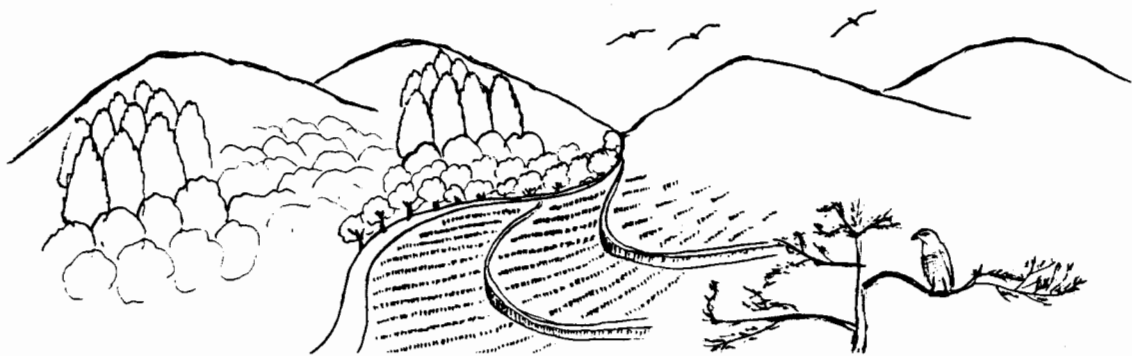


図2 自宅周辺での秋のタカ渡り数の推移



### 日本野鳥の会本部調査室から、サシバ営巣地の現地調査に来勢！

日本野鳥の会の「サシバ生息調査アンケート」に、私たちの調査結果と川北さんの過去の調査データなどを送ったところ、二百数十件の回答の中で「過去の営巣地を地図に落として記録してあるのは伊勢だけ」であったとのことで、全国3ヶ所の現地調査地の一つに伊勢が選ばれました。選ばれた理由は、「市街地の近くにかけて多数のサシバの巣があったが、今は激減した地域」だったからで、このような例になってしまったのは、とても残念なことです。9月15、16日の両日、本部調査室から小坂室長と山崎研究員が来られ、林さんご夫妻の協力を得て、川北さんの案内でかつて営巣が多く見られた地域を見て回りました。調査結果の概要は、11月7～8日に東京で開かれる里山シンポジウムで報告される予定です（吉居瑞穂）。

# その1 バードウォッチング案内人講座

## を終えて

# 企画部だより

報告:小坂 里香

ご存じの通り、当会の探鳥会行事の運営は、まったくのボランティアで行われています。みなさんは、探鳥会に参加して、担当リーダーの対応に感心したり、逆に、自分だったらこうするのにな、と不満をもたれたりしたことはありませんか。そういうあなたは、すでに案内人の素質十分です。

さる8月30日、松阪市のサンライフ松阪にて、探鳥会運営に興味のある人、またすでに案内人をやっていて、ちょっぴり行き詰まっている人などを対象に、案内人研修会を行ったところ、ビギナー編13名、ステップアップ編は支部長以下10名(担当者各2名含む)の会員にご参加いただきました。主な内容を以下の通りご報告します。

### ビギナー編

担当：橋本富三・西村泉

すでにリーダー(案内人)として活動している企画部担当の橋本富三さん、西村泉さんの体験談と、テキスト「あなたもバードウォッチング案内人」を利用した探鳥会の意義、運営の基本講習に続き、実際に探鳥会の企画をたて、気分を出すために戸外に出て模擬探鳥会を行いました。模擬探鳥会では2グループに分かれて冬の水辺、初夏の野山を想定し、それぞれリーダーとなって挨拶や注意事項、テーマの説明などをしてもらうなど、案内人気分を体験してもらいました。感想は様々ですが、自信のない声も聞かれたようです。最初はみんな初心者なので、まずはサブリーダーや「サクラ」から、一步を踏み出してはどうでしょうか。

#### 参加者感想(一部)

自然保護の意味からも、探鳥会の大切さがよくわかった。何度も探鳥会に出て、リーダーの資質を磨きたい。…Aさん  
探鳥会は、事前準備が大変ということがよくわかった。…Bさんほか  
今日は勉強になった。リーダーとしてはまだまだだが、やれといわれたら精一杯やりたい。…Cさん  
勉強したが、リーダーができるにはほど遠い。…Dさん

### ステップアップ編

担当：中村洋子・小坂里香

まず、初心にかえて、探鳥会とはなにか?なぜ自分は案内人をやっているのか?などなど、自問自答の意味で今回オリジナルのワークシートを使って作業してもらいました。つづいて、ふだんの探鳥会を振り返る意味で、同じくオリジナルチェックリストを用い、探鳥会で押さえたポイント(挨拶やテーマの説明ができていないか、腕章をつけているか、など20項目)を各自チェック。半分しかチェックできない、などのぼやきも聞かれました。その後、慣れてくると

#### 参加者感想(一部)

みな熱心で、参加してよかった。…Eさん  
内容は同じでよいからしばしば行ってほしい。…Dさん  
ふだん会わない人に会えて良かった。…Fさん

怠りがちな、初心者への対応を中心とした基礎講習を簡単に行い、2班に分かれての座談会に入りました。座談会では、探鳥会を自然保護にどう結びつけたらよいか、若い人に参加してもらうようにするにはどうしたらよいか、ベテランの参加者にはどう対応したら

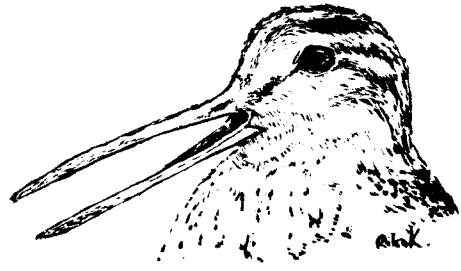
らよいかなどの具体的な悩みが聞かれ、参加者どうして解決法を考えました。悩みがすっかり解決したというにはほど遠いのですが、何かのヒントにはなったのではないのでしょうか。



その2

## 野鳥講座「シギ・チドリ」

好評開催



9月15日(火)、津市の三重県女性センターにて、当支部保護部部長の平井 正志さんによるシギ・チドリについてのお話を聞きました。干潟や河川などで見られるシギ・チドリの代表的な種について、特徴やよく見られる場所などをご自身の見聞や図をまじえてわかりやすく説明していただき、また、自ら撮影されたスライド写真の上映もすばらしいもので、20名ほどの参加者に大変好評をいただきました。シギ・チドリの長距離にわたる渡りや分布についてのお話もあり、参加者のなかからは、「あんな小さな体でよく…」という感嘆の声も聞かれました。

最後に企画部長の橋本 祐子さんから、吉野川(徳島県)の第10堰の問題など、干潟の危機についてのお話もあり、シギ・チドリにとってのこれらの場所の重要性をあらためて認識させられる講習会になりました。

## 参加者感想

(一部)

図鑑だけではなかなかわからなかったのですが、要領よく各鳥の特徴を説明していただいて良かったです。

シギはなかなか識別が難しいが、今日のお話で少しは解るようになったと思います。渡り鳥の長い旅のことなどもっと広く世間にアピールしてほしい。渡りの長さを知れば大切にもらえるように思います。

長年のご経験によるシギの見分け方には感心の至りです。車と望遠鏡がないので歯がゆい思いです。

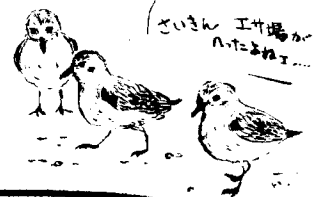
初めて講座に出席させて頂き、得るところ大でした。ついていくのもなかなか大変だと思いますが、今後できるだけ出席し勉強したいと思います。

今日、教えていただいたシギ・チドリのなかで、覚えたのは10種にもならないでしょう。でも昨日よりは確実に印象的なのを数種おぼえました。ありがとうございました。

シギ・チドリは見るシーズンが短いのでスライドや略図で説明していただくとよく理解できる。毎年でも研修会をお願いしたい。

とても勉強になりましたし、スライドの写真も良くて、目の保養になりました。橋本さんの干潟に関するお話が画竜点睛となって良かったと思います。

シギ・チドリというと地味で識別が難しく敬遠していましたが、平井さんのお話を聞いて少しはわかってきそうな気がしてきました。これから積極的にシギ・チドリの識別にチャレンジしていきたいと思います。また、シギ・チドリが安心して休めるような環境が残るよう願っています。



以上、2つの行事にご参加・ご協力ありがとうございました。

## シロチドリ繁殖調査結果速報

保護部 平井 正志

三重県支部では1996年から1998年の3年間シロチドリの繁殖調査を河芸町から津市の海岸で行って来ました。その結果をまとめて速報します。正式な報告は後日発表する予定です。

調査地域は三重県安芸郡河芸町田中川河口から津市町屋浦海岸までのうち漁港およびその周辺の繁殖の可能性の低い地域を除いた全長4.13kmの自然海岸である。この区域を9区に分けて、4月初めから7月末まで毎週末支部会員で調査した。このうち第1区（田中川河口に隣接した海岸）と第3区（東上野団地に隣接した海岸）に保護柵および看板を設置した。1996年から1998年の3年間の調査結果を第1表に示す。ただし1996年は5月20日まで観察されていない地域がある。シロチドリの棲息数は第2表に示す。なお1996年は全域での棲息個体数の調査を行っていない。4-5月では約40羽の成鳥が観察された。1998年ではその後個体数がやや減少した。同年は例年より早く7月初旬から渡りの個体と思われる群が表れ、個体数が増加した。4月から5月の平均成鳥数を2で割った値を番（つがい）数とした。番あたりの孵化ヒナ数は1997年で22/21.2=1.04であり、1998年では14/19.5=0.72であった。孵化したヒナは飛べるようになるまでさらに減少するであろう。おそらく北アメリカ東海岸で絶滅が危惧される piping plover では番あたりの飛べるようになったヒナの数に1988年から1995年の平均で1.33-1.39羽と報告されている。今回の調査結果は孵化ヒナ数であるので直接は比較できないが、明らかにこれより低い繁殖率となる。この繁殖率では現状のシロチドリ個体数を維持できないであろう。

第1表 三重県中部海岸におけるシロチドリの繁殖

調査年	営巣数 <sup>1)</sup>	結果不明の巣	孵化巣数 <sup>2)</sup>	孵化巣率 <sup>3)</sup>	ヒナ群数 <sup>4)</sup>	孵化ヒナ数 <sup>5)</sup>
1996	21	0	5	23.8(%)	6	21
1997	48	4	4	9.1	5	22
1998	27	2	3	12.0	5	14

- 1) 観察された巣の数                      2) 観察された巣のうち孵化が確認されたもの  
 3) 孵化巣数を観察された巣-結果不明な巣で割った百分率  
 4) 観察された巣とは別の巣から孵化したと考えられるヒナの群数（巣の数に相当）  
 5) 孵化したヒナの総数

## 考察

## 繁殖の阻害要因

3年間の調査でこの調査地域での繁殖状況はほぼ把握できた。繁殖の成功率は3年とも極めて低い。また孵化したヒナの数も現状の個体数を維持するに足るとは考えられない。現状の個体数は他地域からの流入により維持されているのではなかろうか。特に1998年は孵化ヒナ数も少なかった。この地域での主な繁殖阻害要因は人の活動であり、散歩およびレジャーによる繁殖妨害が大きい、その他にハシボソガラスなど野生生物による捕食によるものがある。特に1998年は第4区（河芸町中別保付近）での水上ジェットとそのために海岸への自動車乗り入れが増加し環境が大きく悪化した。孵化したヒナは2羽のみで、それも直後に失われた可能性が高い。また第6区（河芸町河芸港から津市との境まで）では7月に釣り客の自動車の乗り入れが多く、少なく

とも 3巣が被害にあった。

また第4区ではゴミ焼が以前から頻繁に行われており、ハシボソガラスの群が1998年に新たに定着し、繁殖阻害要因となったと推定される。また毎年行われる海岸清掃も繁殖阻害要因となりうる。町屋浦では1997年に重機による海岸清掃で少なくとも1巣が失われた。7月上旬に行われる河芸町の海岸清掃でも毎年ヒナや巣が発見されている。

第2表 シロチドリの個体数(週末の個体数)

調査日	全個体数	成鳥数	調査日	全個体数	成鳥数
1997年			1998年		
4/13-14	45	45	4/17-18	53	53
4/26	41	38	4/25-26	30	30
5/ 3- 4	44.5	43	5/ 1- 4	49	49
5/10-11	58	54	5/ 9-10	46	39
5/16-17	38(43)	37	5/30	30(33)	24
5/31-6/1	40(41)	37	6/14-15	16	
			6/20-21	25	
			6/27-28	13	
			7/ 3- 5	28(*)	
			7/11-12	47	
			7/25-26	69	

4- 5月の平均成鳥体数

4-5月の平均(n=6) 42.3羽( 21.2番) 4-5月の平均(n=5) 39.0羽( 19.5番)

注：1997年は第2区を除いて、1998年は第5区を除いて調査した。週末のどちらかの日に測定した値を重複を除いて合計した。両日測定値がある場合には平均した。(\*)：一部に欠測箇所がある。( )内の数字は1997年では第2区を、1998年では第5区を含めた棲息数。

シロチドリ繁殖保護のために

海岸は公共のものであり、野鳥の会のようなボランティア団体の活動だけでは限界があろう。行政機構が積極的に関与することが必要である。今年三重県はシロチドリ繁殖保護を喚起する看板を海岸に設置したが、それ以外の積極的保護策は取られていない。自動車の乗り入れを禁止するか、乗り入れられないような柵を設置することは高い効果が期待される。白塚海岸にはウミガメ保護のため、津市が今年設置し、ほぼ完璧に自動車の乗り入れを阻止した。その他、野犬の駆除を継続する、周辺住民等に保護を呼びかける、海岸での犬の散歩には鎖を付けるよう徹底する、営巣地付近に入らないよう注意を喚起する、等の対策が必要である。また海岸清掃についても時期、方法について再検討する必要がある。



## 1998年春シギ・チドリ調査結果報告

春と秋に行ってるシギ・チドリ調査（カウント）の1998年春の結果を報告します。この調査結果は期限までに報告のあったものについては、「日本湿地ネットワーク シギ・チドリ委員会」にも報告しています。調査にご協力いただいた方々ありがとうございました。

渡り途中のシギ・チドリ類が餌をとり、休息していく干潟や湿地は、常に開発や破壊の危機にさらされています。それらの行為に対して意見を述べたり、自然保護、環境保全のための提言を行っていくには、三重県支部がデータを持っていることが重要です。そのため、このような調査を行ってデータを集めていきたいと思ひます。

### 【調査地と調査者】

- |                            |                      |
|----------------------------|----------------------|
| A：朝明川河口（尾畑玲子）              | H：雲出川河口～五主海岸（谷本勢津雄）  |
| B：石原地区埋立地（木村裕之）            | I：曾原新田～喜多村新田（谷本勢津雄）  |
| C：鈴鹿川河口・吉崎海岸・鈴鹿川派川河口（木村裕之） | J：三渡川河口～阪内川河口（谷本勢津雄） |
| D：鈴鹿川中流（平井正志）              | K：愛宕川河口～櫛田川河口（谷本勢津雄） |
| E：田中川河口（平井正志）              | L：外城田川河口（橋本祐子・戸上ち津）  |
| F：豊津浦・町屋浦（平井正志）            | M：宮川河口（橋本祐子・戸上ち津）    |
| G：安濃川河口～志登茂川河口（西浦克征・西浦恵子）  |                      |

調査地	A		B		C			D	E	F	G		H	I	J	K	L	M
調査日	5/11	5/15	6/4	6/6	4/1	4/23	5/13	5/23	5/10	5/17	4/27	5/15	5/2	5/2	5/2	5/2	5/4	5/4
ダイゼン							1											4
イカルチドリ								8										
コチドリ				2	2			1										
シロチドリ	2	2	38	50	43	8	26		10	28	6	5	5			16		2
メダイチドリ				2		46	7				34		17			8		
ケリ					2	3	2											
オオソリハシギ													4	8	2			
チュウシャクシギ	4	6				5	11		13	1	34	14	40		98	31	90	75
ホウロクシギ																		1
ツルシギ														23				
アオアシシギ							2							11		1	1	
タカブシギ					1													
ソリハシギ			3	2												11		3
イソシギ		1						1								1	2	1
キアシシギ	32	26	5	7			54	1		4		91		7	6	38	19	
キョウジョシギ	4	12					40			45	2	14	10		12			144
オバシギ			14	4														
コオバシギ			2															
ミュビシギ					17	170	430											
トウネン						3				2								
オジロトウネン										4								
ウズラシギ				5														
ハマシギ	18		1	1	4		121			7	58	43	510			±300		191
合計	60	47	63	73	69	235	694	11	23	91	134	167	586	42	107	±386	131	440
種数	5	5	6	8	6	6	10	4	2	7	5	5	6	3	3	9	4	9

## 事務局だより

〈木村京子〉

## 本部・渋谷事務所が移転しました

《移転先》〒151-0061東京都渋谷区初台1-47-1  
小田急西新宿ビル1階

9:30~17:30 土・日・祝日定休

会員センター 企画室	☎03-5358-3510
会員センター 業務室	〃 3511
編集局	〃 3512
総務部	〃 3513
企画部	〃 3514
ネイチャースクール	〃 3516
サンクチュアリセンター	〃 3517
保護・調査センター	〃 3518
	F A X 〃 3608
企画事業センター	〃 3519
通信販売受付	〃 3515
	F A X 〃 3609
バードショップ	12:00~19:00, 日・祝日定休 〃 3584

## 三重県支部会員名簿について

三重県支部報「しろちどり」第20号・保平様の「新入会員雑感」で会員名簿のご提案がありましたのでご説明いたします。

三重県支部では以前理事会で話し合い、三重県支部の名簿は配布しないということになりました。理由は、名簿の外部への流出を防いで個人情報を守り、三重県支部の会員の方々にご迷惑をおかけしないためです。営利目的で名簿が売り買いされている状況やプライバシー保護の重要性、さらに三重県支部は自然破壊に対して意見を述べていく団体であることを考えていただければ、ご理解いただけると思います。

必要な場合は探鳥会等でご本人にお尋ねいただくか、三重県支部事務局・木村や各地区の代表までお尋ねください。今のところ名簿の配布は考えておりませんので、どうかご了承を。

## 事務局日誌

- 5/16 三浦谷休猟区意見書提出→紀北県民局生活環境部  
19 1997年度事業収支報告、三重県支部規則変更報告、調査事業受託報告、等→本部総務部  
29 南勢地区関係鳥獣保護区等同意書、要望書等提出→南勢志摩県民局生活環境部  
6/9 長島町松蔭排砂地(コアジサシ繁殖地)取材の朝日新聞記者に同行(木村)  
10 木曾川下流工事事務所・県自然環境課に同行し長島町松蔭排砂地(コアジサシ繁殖地)へコアジサシ繁殖の確認に行く。(木村)  
13 鳥獣保護区公聴会意見書提出→南勢志摩県民局生活環境部  
15 東員町笹尾・城山銃猟禁止区域意見書提出→東員町  
北勢町小原一色地区銃猟禁止区域意見書提出→北勢町  
23 四日市港管理組合・日本道路公団・県自然環境課のコアジサシ繁殖の確認・保護対応に四日市市内のコアジサシ繁殖地へ同行(木村)  
27 北勢町小原一色地区銃猟禁止区域意見書再提出→北勢町  
7/23 川越町高松海岸を通る霞4号線についての質問状提出(楢原、木村)→四日市港管理組合  
川越町高松海岸を通る霞4号線についての質問状をマスコミに公開(楢原、木村)  
30 津地区関係保護区等同意書、意見書等提出→津地方県民局生活環境部  
8/2 三重県支部理事会(役員)  
11 上野市猪田大池銃猟禁止区域同意書→上野市  
18 四日市港管理組合・県自然環境課の四日市市のコアジサシ繁殖終了確認に同行(木村)  
28 四日市港管理組合より高松海岸を通る霞4号線についての質問状の回答を受け取る。  
9/23 霞4号線に関する川越町高松海岸視察会(役員)  
24 負傷し保護されたアカエリヒレアシシギの世話を頼まれる。(木村)

探鳥会と難聴者

森脇 武文（久居市）

「鳥合せをしましょう、はい！ あなたは何？」と次からつぎへと鳥の名が…、参加者の声が弾む。だいたい、20～30種類がでてきます。私は最初、「どうして判別されるのか？」と不思議でならなかった。私が見たのは、せいぜい3種類の鳥しかいない。探鳥会に参加して3回ぐらいにして、始めて探鳥会での自分の存在がわかった。それが“囀り”と知った瞬間、幻滅の悲哀をひしと感じました。耳を澄まして、さっさと豆ノートに記入される同行者をただ眺めているばかりの私。正直なところ、“囀り”はカラス、ヒヨ、ウグイス、時たまにコジュケイしか鳴声が聞こえない、私は難聴者。また、「ヒ」と「イ」などの発声音の区別が出来ない聴力。

幼時から両耳の中耳炎を患い、今は電話、テレビ、一般の会話（例…支部の総会）など殆んど聞こえない。従って、学生時代、社会へ出てからの職場での苦勞（業務の7～8割が聴力に関係する仕事が大半を占める時代）に難儀を重ねて来ました。ようやく勤め家業

をやめて、せめて一人で楽しめる自然観察をやり始めた探鳥会ですら、私にとっては一つの落穴であった。

しかしながら、幸いにして優れた探鳥会のメンバーの皆様方が何くれとなくこの私をカバーして下さるので、これを力として探鳥会に参加して、お尻からぼとぼと会員の皆様について行っています。因みに、私は今年で満八十歳になります。今後も、よろしくご指導を特にお願ひ申し上げます。

「テレビで貴方を見ましたよ！」と予期しない人から声をかけられたのは、これで2人目。5月10日の探鳥会でのテグス拾いの実況放送。いずれもNHKテレビで見られた由。よぼよぼの老人がそんなに撮影される価値があるとは不思議です。とにかくも、野鳥の不勉強を欄に上げて、ひとしきりテグス拾いを説明しました。非常に好感をもたれました。これも、まさかの印象であったようです。今後もせいぜい、会員の皆様について行きたいものです。

鳥の賑わい百分の一

及川 郁郎（鈴鹿市）

73才になり、足も弱り、おまけに起立性低血圧で長時間歩行も困難になりました。ところが自転車なら、ゆっくりと一日中でも走れるのです。自転車をこぐ姿勢が人間のご先祖様サルの四足歩行に近いという退行現象のようです。旅行も折りたたみ自転車の車内持込みで出かけます。ということで、バードウォッチングも毎年一回1月に探鳥会のある石垣池と近鉄千代崎駅近くの岸岡山緑地ぐらいのものです。鳥ばかりでなく、あらゆる自然が一年一年減って行くこと、怒りを乗り越してあきらめに近い心境です。

私の生まれは東京三鷹です。徳川將軍の御鷹場のあったところ。大岡昇平の「武蔵野夫人」に描かれた、はげと云われる清冽な湧き水がそこかしこから流れ下って水車小屋がゴットンゴットンと音を立てていました。お目にかかったことはありませんが、中西悟堂さんの修行された深大寺も近くでした。井の頭公園でただ一回、木の間隠れに見たサンコウチョウの美しさ、夏の朝、雨戸を開けたところ、目の前にヨタカがうずくまっているのにびっくりしたこともあります。この方は虫の鳴き声にまじってキョキョというつぶやきが時折聞かれました。

秋には空高くサンショウクイの群れがヒリヒリンとしろちどり第21号 14

鳴きながら渡って行きました。この方は終に姿は見ずじまいでした。小学生で胸を病んで寝ていた頃、冬になるとどこからともなくシジュウカラの群れがやって来ます。ツビーツビという甲高いさえずり、一時もじっとしていない快活さは生きる喜びの象徴でした。

伊勢湾台風のあった前年、鈴鹿に住むようになってから、生活に追われて鳥を見るゆとりもあまりありませんでしたが、四五年前から岸岡山に通いはじめました。岸岡山のまわりで見た鳥を数えて見ます。

シジュウカラ、ヒガラ、ヤマガラ、エナガ、ウグイス、メジロ、ヨシキリ、ヒバリ、ホオジロ、モズ、セッカ、キビタキ、イカル、コジュケイ、キジ、カワセミ、シギ、ケリ、カワラヒワ、アオバズク、ジョウビタキ、ゴイサギ、アマサギ、アオサギ、カルガモ、カイツブリ、ヒヨドリ、ムクドリ、ツバメ、カラス、スズメ。その他カモ類は、私には同定不能です。

二三年前からめっきり減ってしまい、今年はとうとうシジュウカラも吾が家にはやってきませんでした。私の記憶にある武蔵野と現在の鈴鹿平野を較べると、実感として百分の一ぐらいというところでした。したたかに生き永らえて来た人類も、やがて思い知らされる時が来るのではないかと思わづらっているのです。

鷹渡る 柴原 勇 (伊勢市)

鷹渡る伊勢路に多き猿田彦

巢燕や土間で渡さる下足札

鶴の干潟満ち来る汐の迅さかな

小鳥来る十年なじみの理髪店

いつの間に鴨来てみたり神の池

(注)猿田彦:にはぎのみこと降臨の際、先頭に立って道案内した神。

"囀りや女主導の探鳥行"の仲間に入れてもらって3年近く、目も耳もにぶいので、進歩はありませんが、歩くだけでいいと思っています。これからでもできるだけ参加します。よろしく…

野鳥の会3年生 山田 昭子 (伊勢市)

会員証をみると、入会したのが1996年10月。ちょうど、満2年になりました。なんだかずーと前から入っている様に思えるのですが…。指導して、いろいろ教えて下さる方々がやさしく、おもしろく、その上さっぱりした人が多いせいかな? それとも、"横のつながり"が魅力的だったかも知れません(以前は"縦のつながり"が多かったので)。とにかく、鳥と共にまわりの人達にはまってしまった様です。

今年の夏は、北海道の釧路にまで鳥を見に連れて行ってもらったのです! 以前、大阪に居た頃は、カラスとスズメとハトぐらいしか知らなかったのですが、さまざまな鳥の声、色、しぐさに"どうして、あんな声が出るんだろう?"とか、"何んてきれいな色の鳥なんだろう?"とか、不思議と楽しさと喜びでいっぱいです。自然って、すごいですね!

これからも、もっともっと、ス・テ・キ!をみんなと一緒に感じたいと思っています。

## 探鳥会報告



### ○三重県民の森探鳥会

・日 時: 1998年 6月14日 (日) 雨のため中止

### ○東青山四季の里探鳥会

・日 時: 1998年 6月14日 (日) 雨のため中止

### ○奥山権限ブナ林探鳥会 (青山町)

・日 時: 1998年 6月28日 (日) 9:30~12:00

・担 当: 前沢 昭彦

・参加者: 4名

・観察種: オオルリ、ミソサザイ、ウグイス、シジュウカラ、ヒヨドリ、ヤマガラ、ヒガラ、カッコウ、カワラヒワ、イカル、ホオジロ (11種)

こんないい自然林の観察なのに、もっと人が来ていたらなあ (参加者の声)。

### ○宮川下流探鳥会 (伊勢市)

・日 時: 1998年 7月 5日 (日) 9:30~12:00

・担 当: 小坂 里香、橋本 祐子

・参加者: 19名

・観察種: カワセミ、ムクドリ、ツバメ、ササゴイ、アオサギ、カワラヒワ、ホオジロ、トビ、ヒバリ、カルガモ、コサギ、カイツブリ、セグロセキレイ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、カワウ、ダイサギ、スズメ、ハシブトガラス、ハシボソガラス、

### イカルチドリ、ドバト (22種)

親水公園などの野生動植物の生活を脅かす施設が宮川流域でも多く計画・施工されているのに危機感をいだき、その気持ちを伝えたかった。

### ○夜鳥探鳥会 (上野市高旗山)

・日 時: 1998年 7月25日 (土) 20:00~21:30

・担 当: 武田 恵世、塗矢 博一

・参加者: 8名

当日、花火大会があったため、目的のヨタカ、アオバズクの声は聞かれなかった。

### ○愛宕川、櫛田川探鳥会 (松阪市)

・日 時: 1998年 8月30日 (日) 10:00~12:00

・担 当: 谷本 勢津雄、西村 四郎

・参加者: 28名

・観察種: カワウ、ダイサギ、ムクドリ、カルガモ、ツバメ、セグロセキレイ、セッカ、カワラヒワ、ソリハシシギ、チュウシャクシギ、キョウジョシギ、ミサゴ、コサギ、ダイゼン、ハクセキレイ、カイツブリ、キアジシギ、オバシギ、アオサギ、トビ、ウミネコ、キジバト、スズメ (23種)

## ○鈴鹿派川探鳥会（楠町）

- ・日時：1998年 9月 6日（日） 10:00～11:30
- ・担当：濱中 勝彦、鹿島 素子
- ・参加者：6名
- ・観察種：カワウ、ダイサギ、コサギ、アオサギ、カルガモ、トビ、コチドリ、シロチドリ、ダイゼン、トウネン、ハマシギ、アオアシシギ、キアシシギ、イソシギ、ソリハシシギ、チュウシャクシギ、ユリカモメ、ウミネコ、アジサシ、キジバト、ツバメ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、モズ、セッカ、ホオジロ、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス（30種）

## ○安濃川河口探鳥会（津市）

- ・日時：1998年 9月15日（火） 9:30～11:30
- ・担当：西浦 克征、平井 正志
- ・参加者：14名
- ・観察種：チュウシャクシギ、オオソリハシシギ、キアシシギ、ソリハシシギ、イソシギ、トウネン、シロチドリ、カワウ、ウミネコ、セグロカモメ、アジサシ、アオサギ、ダイサギ、コサギ、カルガモ、キジバト、ハクセキレイ、ホオジロ、セッカ、ムクドリ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス（23種）

散歩などでこの付近を何度か歩いているが、こんなに多くの鳥が身近にいることに気付かずに過ぎてきた。スコープで見るシギのクチバシの違いや鳥の美しさに感激した（参加者の声）。

## ○やすらぎ公園探鳥会（伊勢市）

- ・日時：1998年10月 4日（日） 8:30～11:00
- ・担当：今村 禎、林 淳子
- ・参加者：55名
- ・観察種：サシバ、ハイタカ、チョウゲンボウ、チゴハヤブサ、ミサゴ、トビ、メジロ、ホオジロ、ヒヨドリ、カケス、モズ、キジバト、エゾビタキ、カワラヒワ、ツバメ、ヤマガラ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ウグイス、シジュウカラ、ハクセキレイ（21種）

時間帯	サシバ	その他
5:40～ 5:59	439	
6:00～ 6:59	128	
7:00～ 7:59	59	6
8:00～ 8:59	262	1
9:00～ 9:59	76	1
10:00～10:59	14	
合計	978	8

（注）6時までの439羽のサシバは、やすらぎ公園のすぐ東側にねぐらをとっていたものです。

## ◎次号原稿募集

支部への要望、鳥、自然について日頃思うことなどを、気軽にお送り下さい。  
 締切り：1998年12月31日  
 郵送先：〒  
 電子メール送り先：

林 淳子 宛  
 吉居 清 宛

## 編集後記

多忙をきわめる谷本編集長に代わり、林淳子、吉居瑞穂で頑張ってみました。紙面作りは吉居清さんにお願ひしました。特集「夏鳥はいま…」はいかがでしたか。年々、野鳥たちの環境は厳しくなっています。研修会や調査・保護活動への会員の参加が少ないように思います。もっと積極的に関わり、環境保全のために協力し合っていきたいものです。（林）

しろちどり第21号 1998年11月発行

題字 濱田 稔  
 表紙絵 小坂 里香 イラスト 山田 昭子  
 編集 林 淳子

発行者 日本野鳥の会三重県支部  
 〒516-0026 伊勢市宇治浦田 2丁目 9-4  
 杉浦 邦彦方

印刷 館 印刷〒510-1321 三重郡菟野町田口1903-3